

鶴衣

後編

上

0-78 (印)

俳諧資料カ一卜	
年代	
編者 (筆者)	
書名	鶴衣後編
備考	上

(下垣内蔵)

鷗老辭 四藝賦

隱居辨 刺髮辨

自名附說 檀道画讚

雪請序 脚 說

吊不孝文 替補破茶碗詩

贈与茶卷文 脚 頌

金山樹樓記



皇州町 電話〇八三三七一六八五四番 下垣内 和人 千737

序口

うつら衣を編續編をてに世母のりて

大それとおろしり子ありぬ今も後編

拾遺乃古き神をつて流くまき舞ひよ

あきあよ乃家母さづく為姓の横井氏

時般まゝ並明と称し又順寧と称を後

暮水と称とるの号と也有とらひよみか

舞臣とらひよの蒼山半掃とらへ居藩乃

世臣あり

巴人亭主人



Faint, illegible handwritten text, possibly bleed-through from the reverse side of the page.

三つら夜 後編

歌老辞

芭蕉翁の五十一まで世とさうのいれ文子名を
難波の西齋も五十二まで一期を終りてさうに
末二年の辞世と強せりて虚弱多病あるはれらの
年よりして今年ハ五十三れ秋もさぬわが
中納言のあきくらの逃れれはいつてさうの
よせさうとよみと歎れんもやさひさるる
あれりさうされとさ世に立交んとされさ
さうあり申きてねも若れあまはさう
まつらありてあきくらのさう
うらみのまも年とあれと出さるる

この端唄の奇朽と七世お孫にあひ一時久き
年月の別あうらむとていふのいふもあうらむん
大きある扱とらふ一我れより不様根めて山樂
とてさうさうあうま根ありさうとていふのついでさうあう
ことにあらぬほ一まじさありまも上京の人詩書
又まじのいふまじと深き去籍といや一うま文種
万世の後も名とてむ一ふりりて人日用乃
るまも用申さる或い文庫のまじに何れ何れ
け強何百何十文と定家や棟乃まじとて口封く
又いけ善利分まじりまじり番偏にまじまじと交
徴明、治とのこといふまじあまじまじまじの外
あうらむあうらむまじまじまじまじまじまじまじ

出のまじはまじは只よあ安まじりて要あるべしとて
能筆、まじりて一字、二字、用いしとていふ
ことりりまじりてまじりてまじりて又画まじりて位乃
あうらむまじりて一能画のまじりてまじりてまじりて
乃男ハ瘦とてまじりて大は繪のまじりて肥とて表あり
うき世繪ハ又平にまじりて菱川まじりて今西川まじりて
まじりて一襖筆をのまじりて聖粟牡丹まじりて
ぬ花まじりて人より大きある誰のまじりてまじりて
まじりて目まじりてまじりて又ハ教寺まじりてまじりて
遠水まじりて遠人の目鼻まじりて帆まじりて
まじりてまじりてこれらもまじりてまじりて
俳諧師の繪ハ上まじりて下子の海流まじりてまじりて

此のこゝろの我も我流のなめくろくして世に
結の昼夢とくけを綴蓋のなめくろくして世に
まじりあはれ恥ぢくあつてあつてあつて
おろくはよと若田の法原とを記あるの権人
あつては年比祝の満ち遊するものあり

隠居辨

箕山の月ハさうさうとてやういふ五湖のあつて
して窺くく一垣ハ紫陌ハ隣さくも大隈の市
もくくさういふ菴ハ芙蓉の陰まよりのれも小隈の
凌敷よりも浅くされと昔の隠者とさういふは
人の世にきくことわづらひのれある人の世に
てさういふ名をさういふことさういふは
仇もあま人の多くと申す五あに金れ春板と出
たりとも同くまよりの人ともさういふあま人の
とむさうせむしあられ世のかくせんと尋ね
鬼のあれとさういふあれさういふ世にこれあ
中くさういふさういふさういふ世に隠居あ
二つ今もさういふとみそくにちうきま明の月さうい
門ハ世に用させかりまよりの人あつてくくさうい
とむさうせむしあられ隠居さういふ世に社を
と出たりこよるる隠居とさういふ人さうい
あつてさういふさういふ後世さういふさうい
あつてさういふさういふ後世さういふさうい

一もあつて余つせあまき人の朝の夢度の志つ
つくりも飽けそ次第にほろりくらくく候とれ
いくりし申りありこれに返き友あれと申とれ
くらなりとに世中の清水にこそよせとらうく若
とらうく一始まに似ぬ人もある一花山の上皇の
うらまき名よハきせめいりとうとらふ少心の体
まろりこれ俗の誇みありがやげんことよしなり
とらとこれと世の始を申すまはよくせのちるま
るにいとや我方の上をいりりしよの陰を我
ちりあはれにきりくくこれとやとらと毒もい
夢ちもあつて人よあつて一おとらとらと西を
のちつとらと一してすれとらと鬼もあつて
世よ人よ我もあつて世に病よあつてあつて
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
られんハ南無の字とやん此男の人のいり
くくは老と病と一あつて一ま世の風はつれ
出づりありきこれと誰をおれ何を恥とさのこハ
逃るくくくくくくくくくくくくくくくくくく
桃よ草蒲よ神ありとらとこの娘入りこの泣き
まろりあつていととらとらとらとらとらとらと
これといとらとらとらと世に店とまらとまらと
くく遁世者としとらとらとらとらとらとらと
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
通称とありては挑灯のちとらとらとらとらとら

こゝろは甲に世のつねと秋の月を
こゝろは乙に世のつねと秋の月を
こゝろは丙に世のつねと秋の月を
こゝろは丁に世のつねと秋の月を
こゝろは戊に世のつねと秋の月を
こゝろは己に世のつねと秋の月を
こゝろは庚に世のつねと秋の月を
こゝろは辛に世のつねと秋の月を
こゝろは壬に世のつねと秋の月を
こゝろは癸に世のつねと秋の月を

能因の天海の古書もあつて
雨にみ穀のぬきもあつて
あつて雨とついです井あつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて

言此衆のあまのうらみのあはし

脉説

世を捨てる法呼の抱く人さうに友よ明くして
みけあすいお地さうにませつはまをなす一神乃
まうけも嘆氣にさくらぬあつもの、藜も冬くんで
抱くま友のこころうまうまもあうりうのわい
又らまこのをさうこそまもくまの慾あまを
よりこころや我うく世に捨れまうまかんと乃
縁をせまうまのうまやまあうりあうり
凍餒の患いらすうま干し煤をまも世に捨れ
ある潤るも子まをまをまうま一用ま抱のま

う心とらま一抱うま多用あまをま
抱子ハ定規まあまれま煙まおれ松とあま
匠中ハ酒ハ漉まも火燵のまハ代ま
ま一ま一抱うま多用の省財ま地ま
まの海法あまうまよま呼吸まかま一抱
喚く用と兼れ口ハ飲食まあま言徳
乃用ままう天カ一人とまうま
のままあま目とまらまは因果お法
まのせらまうま帳ままのまも一ま
天のま抱まうまふま又まらま
のま一ままのま天の

懐旧を神をめぐりて一耳も及ぶ一集も及ぶに
これハく風物も大切あれども我々の心は
いされと縁ハくもむにさしむるもさしむるも
縁の下よりいハ何とやい場亦さしむるもさしむるも
心もさしむるも天にこののりさく後ハこの縁もさしむるも
あれと上下の心字ハさしむるもさしむるもさしむるも
さしむるも

友とむし縁おしり秋の言

望嶽樓記

樓成りしり成りて望嶽とよみなりハいつともさしむるも
富さしむるもさしむるもさしむるも望嶽の船を東南に
ひらけしれどかの望嶽のつらさくそ千里吟時乃
内田あり世あり村さありと井社佛國のつらさの
あく西の似てく通るるさしむるも竜興寺は龍吟
して花まら雨を催し猿投心の猿のまよきさ
月をさしむるも下戸を解のつらさくさしむるも遠くを向り
路をさしむるもさは上戸ハ酒の申りささしむるも麴池よ
涎を流しさしむるもさしむるも主なる文章に富むるもさしむるも
さしむるも遊子あり皆一時の英才なりして新詩百篇瞬く
うらよあり雅談一日ありさしむるもさしむるもおやあとの
花もさしむるも向いさしむるもさしむるも天津の徳母が
さしむるもさしむるもさしむるもさしむるもさしむるも
さしむるも詩歌のほいさしむるもさしむるもおまよ俳諧の

又とほくし其をいへるもあはれいふ知んぬ砥石を捨ひ
てまを塚ま^{灰汁}あはれいふもあはれいふを捨てて寝を寝る心のためはれ
いふも不才なる何と云へば砥石あり何と云へば灰汁
よ代むされとも我がまらるるあり世に榮の椽補の
幕毛程は^餅まらるるもあはれいふ椽花一日の学をまら
ハ其なるもの動してされとありい知るにやまら
け樓ハ多しに松樹千年の久しきを期そへ
さるはらのもの動してありい知るにやまら
名心ありとありあはれいふもあはれいふもあはれいふも
幾代の齡とてあはれいふもあはれいふもあはれいふも
あはれいふもあはれいふもあはれいふもあはれいふも
あはれいふもあはれいふもあはれいふもあはれいふも

其日の供よいふへいふとら

月花よあはれいふもあはれいふもあはれいふも

共三冊
吉田氏